

れを謂ふなり。

僧を罵ると邪姪とをもちて患しき病を得て死ぬる縁

第十一

聖武天皇の御世に、紀伊国伊刀郡桑原の狹屋寺の尼等願を発し、彼の寺に法事を備け、奈良の右京の薬師寺の僧題惠禪師を請へ字は依綱禪師と曰ふ。俗姓依綱連なり。故に以ちて字とす、十一面観音に奉仕りて悔過す。時に彼の里に一の凶しき人有り。姓は又忌寸なり字は上田三郎と云ふ。天骨邪見にして三宝を信はず。凶しき人の妻上毛野公大椅の女有り。一日一夜に八の斎戒を受け、悔過に参行きて衆の中に居る。夫外より家に帰りて妻無きを見、家の人に問ふ。答へて曰はく「悔過に参往けり」といふ。聞きて瞋怒り、すなはち往きて妻を喚ぶ。導師見て、義を宣て教化ふれども信受けずして曰はく「無用語して、汝吾が妻に婚ふ。頭割ち破らるべし。斯下しき法師なり」といふ。悪口し多く言ふこと具に述ぶること得ず。妻を喚びて家に帰り、すなはち其の妻を犯せば密爾に闇に蟻着きて嚼み、痛み死ぬ。刑を加へざれども、患しき心を発して濫しく

罵りて恥ぢしめ邪姪を恐りざれば、故に現報を得るなり。口に舌の舌生ひ万言を白すといへども、憤憤を誹ることなかれ。條に災を蒙るが故なり。

蟬と蝦との命を贖ひ生を放ちて現報に蟬に助けらるる縁

第十二

山背国紀伊郡の部内に、一の女人有り。姓名詳ならず。天年慈ぶる心ありて種く因果を信ひ、五戒と十善とを受持ちて生物を殺さず。聖武天皇の代に、彼の里の牧牛の村童山川の蟬を八取りて焼き食はむとす。是の女見て、牧牛に勧めて曰はく「幸願はくは、此の蟬を我れに免せ」といふ。童男辞否びて聴さずして曰はく「なほ焼き食はむ」といふ。慇に誂へ乞ひて衣を脱きて買ふ。童男等すなはち免す。義禪師を御請へて呪願せしめて放生つ。然りして後に山に入り、太蛇の大蝦を飲むを見る。太蛇に誂へて言はく「是の蝦を我れに免せ。多くの帛を略奉らむ」といふ。蛇聴さずして呑む。女帛帛を募りて禱りて曰はく「汝を神として祀らむ。幸乞はくは我れに免せ」といふ。聴さずしてなほ飲む。また蛇に語りて言はく「此の蝦に替りて吾れ汝が妻と為らむ。

は、本説話とは前提が異なり、かえつて本説話からは遠い。一、未詳。二、大般涅槃經、梵行品。梵網經古迹記、下本。

第十一縁 今昔物語集、十六ノ三十八に書承。

一、妻が八斎戒を受持している期間中に、交わつたことをいう。阿毘達磨俱舍論、分別業品、大智度論、十二などの理解と一致。二、和歌山県伊都郡(伊都)かつらぎ町佐野(佐野)に所在。佐野庵寺跡がその地とされる。三、未詳。本説話以外に所伝をみない。四、本説話に描かれた時よりも少しのちの天平勝宝四年(宝勝)、実忠によつて東大寺二月堂に十一面観音悔過がはじめられて(東大寺要録、四)。現代に二月堂の修二会(修二)として遺存。五、名未詳。字の上田は地名、橋本市あたり。本説話以外に所伝をみない。六、文忌寸材満(住吉大社神代記)の子孫の一族か。七、未詳。本説話以外に所伝をみない。八、若くは能於半月半月、或第十四日、或第十五日、受持斎戒、如法清淨、繫心於我、誦此神呪、便於生死、超四万劫、二十一面神呪心經。斎戒を受持して呪を誦すならば四万劫の生死を超え、と述べられる。一日一夜と明記するのは十一面観自在菩薩心密言金剛薩埵經、上。この縁は空海によつて将来されたもの。聖武天皇の御世には、まだ将来されていない。九、八斎戒は在俗の仏教信者の一日一夜に守る戒。内容に関しては諸説があるが、阿毘達磨俱舍論、分別業品に「八所止、離としてあけられてゐるのは、殺生、不与取、非梵行、虚誑語、飲諸酒、塗香、鬘、華、歌舞、觀聽、眠坐、高広、麗床、坐食、非時食、である。一、儀式の主たる役職にちなう僧。二、これは題惠禪師。三、斯下二合、賤(二国会図書館本調製)。大般涅槃經、迦葉菩薩品にみえる「斯下之人」は、大正新脩大藏經の校異によれば、宋本、旧宋本では「斯下之人」。撰集百緣經、五にも「斯下之人」。二「闇」は「闇」の俗字。女性生殖器を「闇」とするのに対して男性生殖器をいう(箋注倭名類聚抄、南方熊楠など)。二、十一面観世音神呪經の呪では、十一面観音への呼びかけは「南無阿利耶路諸吉良婆羅門菩薩摩訶薩阿利耶路諸吉良婆羅門菩薩摩訶薩阿利耶路諸吉良婆羅門菩薩摩訶薩」とされ、後代の梵經抄、四十四でも十一面観音の梵名は「南無阿利耶路諸吉良婆羅門菩薩摩訶薩」とされ、聖者の意の「阿利耶」「阿利也」が冠せられた語形が用いられる。アリア、と唱えただで蟬が救いに現われた、という説話か。

第十二縁 本朝法華驗記、下、二三、今昔物語集、十六ノ十六、などにみえる觀音多寺(紙幡寺、觀音寺)草創説話は、類話ではあるが直接の関係は無い。

三、京都市。三行基の登場する説話で、女人が重要な役職をはたしているものは、本説話以外に中巻二縁、八縁、二十九縁、三十縁。二、中巻八縁。三、将来に善果をもたらす十種の善業。十恵に対していう。項目には諸説があるが、法界次第初門、上ノ上によれば、不殺生、不偷盜、不邪淫(以上三種は身業)、不妄語、不両舌、不惡口、不綺語(以上四種は口業)、不貪欲、不瞋恚、不邪見(以上三種は意業)。法界次第初門、上ノ上は、それぞれを「上」と「三」とに分ける。たとえば、不殺生の止善は殺生の惡をやめること、行善は放生の善をおこなふこと。五戒と十善とは項目の上では重複がある。二、不殺生の止善。三、未詳。上巻八縁にも同じ語がみえる。六、不殺生之行善。一、羽二重(箋注倭名類聚抄)。帛説文云、帛、薄角反、



以尾拍壁、女恐明日白於大德、大德住生馬山寺、而告之言、汝不得免、唯堅受戒、乃令受持三帰五戒、然還來道、不知老人、以大蟹而逢、問之詎老、乞蟹免吾、老答、我振津国兔原郡人、尽問遐邇麻呂、年七十八、而無子息、活命無便、往於難波、偶得此蟹、但有期人、故汝不免、女脱衣贖、猶不免可、得脱墓贖、老乃免之、然蟹持更返、勸請大德、呪願而放、大德歎言、貴哉善哉、彼八日之夜、又其蛇來、登於屋頂、拔草而入、女悚慄焉、唯床前有跳爆之音、明日見之、有一大蟹、而彼大蛇、条然段切、乃知、贖放解報恩矣、并受戒之力也、欲知虛實、問于耆老、姓名遂無、定委、耆是聖化也、斯奇異之事也、

## 己作寺用其寺物作牛役緣第九

大伴赤麻呂者、武藏国多磨郡大領也、以天平勝宝元年己丑冬十二月十九日死、以二年庚寅夏五月七日、生黑斑贖、自負碑文矣、探之斑文、謂、赤麻呂者、壇於己所造寺、而隨恣心、借用寺物、未報納之、而死亡焉、為贖此物故、受牛身者也、於茲諸眷屬及同僚、発慚愧心、而慄無極、謂、作罪可恐、豈心無報矣、此事可録、季葉楷模、故以同年六月一日、伝乎諸人矣、冀無慚愧者、覽乎斯録、改心行善、寧飢苦所迫、雖飲銅湯、而不食寺物、古人諺曰、現在甘露、未來鉄丸者、其斯謂之矣、誠知、非無因果、不怖慎歟、所以大集經云、盜僧物者、罪過五逆云々、

3 堅(采)一堅

4 令(采)一全

5 詎(采)一誰

6 遐(采)一ナシ

7 呂(采)一石

8 便(采)一使

9 復(采)一後

10 脱(采)一境

11 爆(采)一爆

12 老(采)一宛

1 而(采国)一ナシ

2 録(采)一報

3 葉(采)一業

4 寧(采国)一寛

5 飲(采)一飲

6 謬(采国)一説

7 歟(采国)一歟

## 常鳥卵煮食以現得惡死報緣第十

和泉国和泉郡下痛脚村、有一中男、姓名未詳也、天年邪見、不信因果、常求鳥卵、煮食為業、天平勝宝六年甲午春三月、不知兵士、來告中男言、国司召也、見兵士腰、負四尺札、即副共往、纔至郡内於山直里、押入麦畠、々々一町余、麦生二尺許、眼見燭火、踐足無間、走廻畠内、而叫哭曰、熱哉々々、時有當村人、入山拾薪、見於走廻哭叫之人、自山下来、執之而引、拒不知所引、猶強追捉、乃從離之外、牽之而出、隣地而臥、嘿然不語、良久蘇起、然病叫言、痛足矣々々、山人問言、何故然也、答曰、有一兵士、召我將來、押入燭火、燒足如煮、見四方者、皆衝火山、無間所出、故叫走廻、山人聞之、囊袴見膊、々肉爛銷、其骨稟在、唯逕之一日而死也、誠知、地獄現在、応信因果、不可如鳥、鳥慈已見、而食他兒、無慈悲者、雖人如鳥矣、涅槃經云、雖復人獸尊卑差別、宝命重死、二俱無異云々、善惡因果經云、今身燒煮鷄子、死墮灰河地獄者、其斯謂之矣、

1 天(采国)一其

2 札(采)一於

3 牽(采国)一事

4 囊(采国)一塞

5 唯(采国)一准

6 復(采)一得

7 獸(采国)一教

8 其斯謂(采国)其斯謂、來斯謂、一其謂

## 罵僧与邪姪得惡病而死緣第十一

聖武天皇御世、紀伊国伊刀郡奈原之狹屋寺、尼等発願、於彼寺備法事、請奈良右京藥師寺僧惠惠師、字曰依綱、俗姓依綱、故以為字、奉仕十一面觀音、悔過、時彼里有

1 刀(采)一力

2 綱(采)一堀



凶人、姓文忌寸也。云云。上田三郎矣。天骨邪見、不信三宝、凶人之妻、有上毛野公大橋之女、一日一夜、受八齋戒、參行梅過、居於衆中、夫從外歸家、而見無妻、問家人、答曰、參往梅過、聞之瞋怒、即往喚妻、導師見之、宣義教化、不信受曰、為無用語、汝婚吾妻、頭可所割破、斯下法師矣、惡口多言、具不得述、喚妻歸家、即犯其妻、率爾閉著、蟻嚼痛死、雖不加刑、而發惡心、濫罵令恥、不恐邪姪、故得現報也、口生百舌、雖万言白、慎莫誹僧、倏蒙災故也、

3 文(來) 一 文  
4 忌(來) 一 忌  
5 橋(來) 一 橋

6 妻(來) 一 ナシ  
7 解(國) 一 解  
8 倏(國) 一 倏  
9 災(來) 一 災

讀解蝦命放生現報所助緣第十二

山背國紀伊郡部內、有一女人、姓名未詳也、天年慈心、隨信因果、受持五戒十善、不殺生物、聖武天皇代、彼里牧牛村童、山川解取八、而將燒食、是女見之、勸牧牛曰、幸願此解免我、童男辭不聽、曰猶燒噉、慙謝乞、脫衣而買、童男等乃免之、勸請義禪師、令祝願以放生、然後入山、見之大蛇、飲於大蝦、詭大蛇言、是蝦免我、略奉多帛、蛇不聽吞、女寡幣帛、而禱之曰、汝為神祀、幸乞免我、不聽猶飲、又語蛇言、替此蝦以吾為汝妻、故乞免我、蛇乃聽之、高捧頭頸、以瞻女面、吐蝦而放、女期蛇言、自今日經七日而來、然白父母、具陳蛇狀、父母愁言、汝了唯一子、何誑託故、作不能語、時行基大德、有紀伊郡深長寺、往白事狀、大德聞曰、烏呼難量之語、唯能信三宝耳、奉教歸家、当期日之夜、閉屋堅身、種々發願、以信三宝、蛇繞屋、蛇

1 讀 一 讀  
2 曰(來) 一 白  
3 否(來) 一 ナシ  
4 詭(來) 一 詭  
5 蝦(來) 一 蝦  
6 幣(來) 一 幣  
7 幣 一 幣  
8 禱 一 禱  
9 汝 一 ナシ  
10 聞(來) 一 聞

軀腹行、以尾打壁、登於屋頂、昨草拔開、落於女前、雖然蛇不就女身、唯有爆音、如跳鱗、明日見之、大解八集、彼蛇然、擗段切之、乃知、讀放解報恩矣、無悟之虫、猶受恩返報恩、豈人心忘恩歟、自此已後、山背國、貴乎山川大解、為善放生也、

11 登(來) 一 登  
12 背(來) 一 背

生愛欲戀吉祥天女像感示奇表緣第十三

和泉國泉郡、血淨上山寺、有吉祥天女攝像、聖武天皇御世、信濃國優婆塞、來住於其山寺、睇之天女像、而生愛欲、繫心戀之、每六時願、々如天女容好女賜我、優婆塞夢見、婚天女像、明日瞻之、彼像裙腰、不淨染汚、行者視之、而慚愧言、我願似女、何忝天女事自交之、愧不語他人、弟子儉聞之、後其弟子、於師無礼、故遭擯去、所擯出里、訕師程事、里人聞之、往問虛美、並瞻彼像、淫精染穢、優婆塞不得隱事、而具陳語、諒委深信之者、無感不心也、是奇異之事矣、如涅槃經云、多姪之人、画女生欲者、其斯謂之矣、

1 上(國) 一 ナシ  
2 境(國) 一 境  
3 語(國) 一 語  
4 之(來) 一 ナシ

窮女王婦敬吉祥天女像得現報緣第十四

聖武天皇御世、王宗廿三人、結同心、次第為食、設備宴樂、有一窮女王、入宴衆列、廿二王、以次第設宴樂已訖、但此女王、獨未設食、備食無便、大恥貧報、至

1 王(國) 一 ナシ